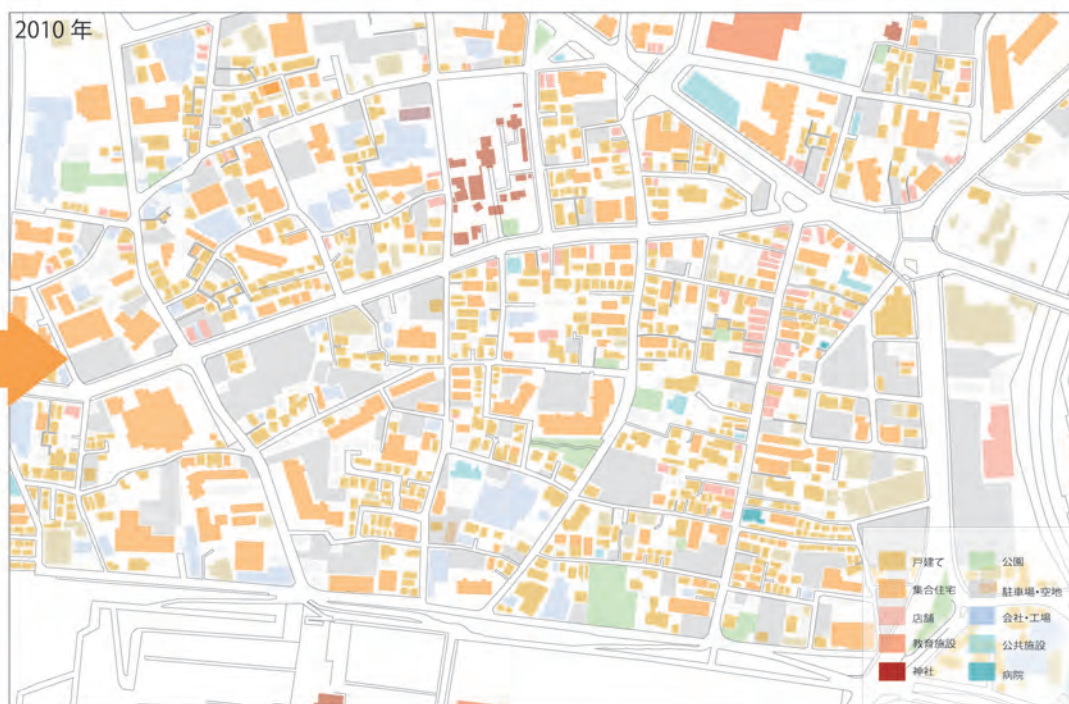
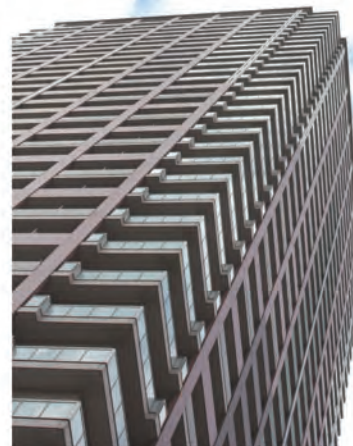




つなぐみちのいえ

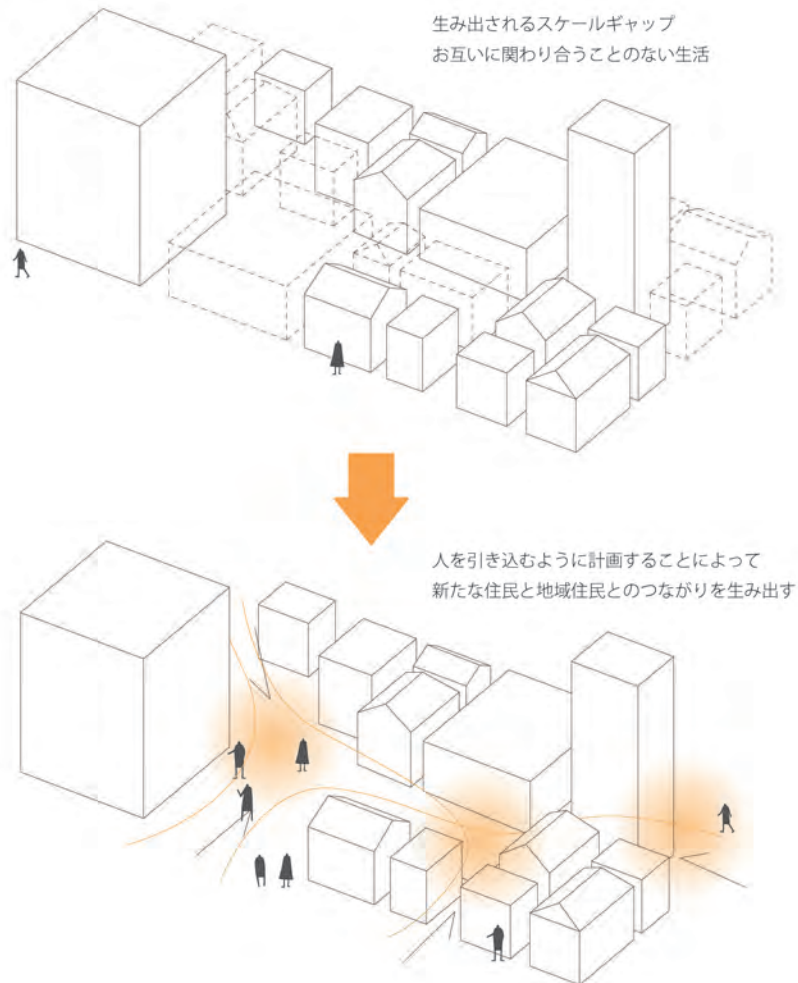
都市の発展に伴いその役割を左右されてきた都市近郊。移ろいやすいその地域における住まいについて考える。

敷地は埼玉県川口市本町。かつて住・工・商の共存が成り立っていた密集地域。近年は宅地化の進行により工場跡地を利用した高層マンションが次々と建てられ、ベッドタウンとして発展している。それゆえ低層と高層の住宅が入り混じるというスケールにおいて異質なものが混在し、個々が独立する状況である。またその状況は異様な街並みを生み出している。



密集地に残る蛇行したふくらみのある路地や袋小路は、異なる用途のバッファゾーンとして機能するだけでなく、人々の交流の場として住・工・商の空間を強く結び付けていた。本計画ではこのような路地の機能を建築的に再構築し、新たな住まいを表現する。

concept



step1. 空き家、老朽化した住宅を選定し、空き地ともに計画。かつての袋小路や路地の場所を継承



step2. 新たな動線を確保しながら、敷地を縫うように壁を建てていく



step3. 壁と壁の間を路地と見立てていき、ボリュームを住戸とする。不規則に開口をあけ、路地と住戸をつなぐ



木が多い公園

路地裏にあふれだす共用空間は
地域住民との結びつきを生み出す

お茶を飲みながら話せる場所

机のある広場

裏の路地には住民のものがあふれ
アクティビティが見え隠れする

ピアノがある部屋

ギャラリー

小さな店や共用空間をきっかけとして、
地域住民を路地に引き込んでいく

イスのある広場

壁に囲まれた小さい広場は
溜まりの空間となる

ご飯が食べれるところ

パンを売っているところ

GL plan





路地から構築された細長い空間での生活は、住戸内で完結せず外へ溢れ出し、領域は広がり、他者との関わりが生活の延長で行われる。様々なアクティビティは路地に色を与え、新たなまちの風景となっていく。

